

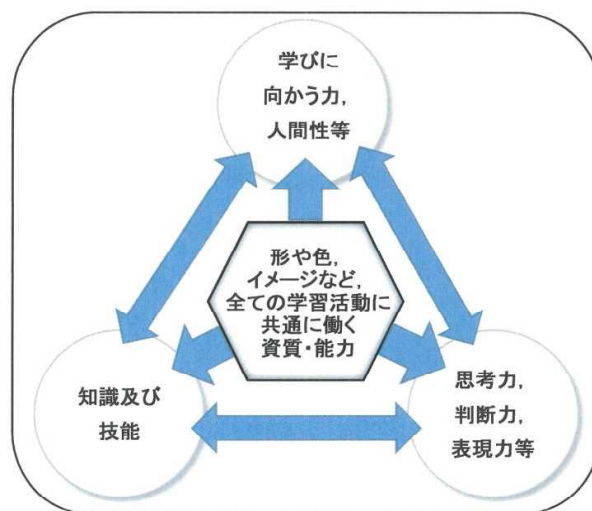
平成31年度 図画工作部会研究計画

1 研究主題

豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動
—であい つたえあい つくりだす喜びを味わう授業づくり—

2 研究主題設定にあたって

造形活動では、子供が材料と向き合って自分の中で対話を繰り返す場面がよくある。それは、「うん、どうしよう」「いいこと考えた」「そうだ、ここを〇〇に変えてみよう」という「心のつぶやき」などに表れ、発想や構想が働いているまさにその瞬間である。子供自身が、造形的な見方・考え方を働かせ資質・能力を発揮し、「学んでいる」瞬間ともいうことができる。このような学びの瞬間は、図画工作科の学習過程にはよく見られることである。また、近くの友達との対話やその製作過程からヒントを得て、迷っていたことを解決したり、自分の表現に生かし高めたりしていくということも珍しいことではない。どのような題材であったとしても、子供たちにこのような充実した楽しい学びの時間を十分に味わわせたい。つまり、図画工作科の授業において、そのような対話ができる仕組みや時間・環境等を教師が意図して設定し、子供たちの学びを深める手立てとすることが大切である。



これまで、図画工作部会は、ものをつくる活動における学びの過程を丹念に見直してきた。また、平成29年度は、研究主題「豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動」から得られた研究成果を生かし、「自分の思いを大切に、つくりだす喜びを味わうことができる授業づくり」という副主題を掲げ、「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」と豊かにかかわらせることで、子供たちは思いを明確にし、その思いを実現しようと主体的に取り組んでいくような授業づくりを行った。その中で、自分と違った発想や表現の工夫に気付いたり、自分の表現の幅を広げたりしながら、表現の質が高まり、つくりだす喜びを味わう姿が多く見られるようになった。

平成30年度は、これまで実践してきた図画工作部会の取組の成果を生かしつつ、平成29年3月の小学校学習指導要領の改訂で示された「三つの資質・能力」の側面から、図画工作科の指導内容を整理した。また、「主体的・対話的で深い学び」の視点から、授業改善を行うこととした。子供が材料にふれた時、自分の思いをどう表現しようかと考える。製作中は、子供同士や教師との対話により、自分の作品を見つめ直し、「つくり、つくりかえ、つくる」作業を行う。鑑賞では、自分のよさを見つけるとともに友達作品のよさにも目を向け、一人一人を大切にする授業を研究してきた。その中で、教師は、子供が材料と向き合い、自分の思い描くゴールに到達し、達成感を味わうための支援の方法を模索してきた。

今年度は、本主題を昨年度に引き続き「豊かにかかわり つながり 自らつくりだす造形活動」、副主題を「であい つたえあい つくりだす喜びを味わう授業づくり」とした。主題の研究を通して、改訂の趣旨を生かした指導になるように研究の方向性や具体的な改善策を明らかにし、図画工作科の指導の工夫・改善を図っていく。

3 研究主題についての考え方

(1) 「豊かにかかわり」とは

これまで、図画工作部会では、造形活動において、「表現内容」（何を）、「表現材料」（何で）、「表現方法」（どのように）といった3つの要素を明確にした授業づくりに取り組んできた。表現活動では、子供が、この3つの要素をしっかりとつかむことにより、自らつくりだす活動が促されると

考える。自分の表したいことが決まっている子供は、主体的に製作に取り組みながら、何を使って表すのかということにも積極的にかかわっていくようになる。鑑賞活動では、3つの要素を基に友達の作品を見ることで、自分なりの考えをもったり、感じ取ったりしやすくなる。そのとき感じた思いは、自分の表現活動を広げたり深めたりすることにもつながる。大切なことは、子供自身が3つの要素と「かかわり」、自分の思いを大切に、主体的に表現や鑑賞の活動に取り組むことができるようになるかである。

例えば、材料は子供と「表現内容」とのかかわりによって「表現材料」となる。また、「表現材料」から「表現内容」が明確になる場合もある。そして、子供はつくりながら自分の思いに合う「表現方法」を見付けていく。表したいことに向かって、材料を変えてみたり、ぬり方や色を変えてみたりと、「つくる」中で「つくりかえる」が生まれる。教師が、子供の「自分はこう表したい」という表現の欲求を大切に、題材を設定したり授業を組み立てたりすることで、子供は3つの要素とより豊かにかかわり、主体的に造形活動に取り組むことができる。

(2) 「つながり」とは

活動中に交わされる教師と子供、また子供同士の対話の中には、自分の表現を認めてくれる言葉に自信をもったり、ひらめきを得たりして、どんどん活動に熱中していく子供の姿がある。友達の行為や、それから受ける自分の感覚から、新しい発想を生み出すこともある。このように周囲とつながったり、認められたり、刺激を受けたりする体験が、表現への意欲を高めることにつながっていく。適宜、グループでの学習を設定することで、材料や場所とのかかわりの中から生まれた気付きや発想を、交流したり話し合ったりしながら、発想や構想にかかわる能力を高めることもできる。異学年集団で活動したり、作品を校内外に展示する機会を設けるなど、活動や作品を介して周りの人たちと交流をもつ場合も同様である。そこで得られる共感や賞賛の言葉から、表現することへの喜びを実感することができる。

授業展開の中で「ひと」「もの」「こと」とつなげていく場を設定することで、「思った通りにできた」「思いをうまく伝えられた」という達成感や、「つくって喜んでくれた」といった自己肯定感が高まる。さらに、「見てもらいたい」「喜んでもらいたい」などの他者意識をもって製作に臨むことで、よりよいものをつくらうとする意欲の高まりが一層期待できる。子供たちが表現や鑑賞の活動を通して交流し、互いの表現の違いやよさを認め合ったり、他者意識をもって表現したりすることで、造形活動の楽しさやすばらしさを体感できるような活動を大切にしたい。また、そのとき味わった喜びや意欲が「話したり、聞いたりする」「話し合う」「交流する」必要感や必然性を生み出し、言語活動の充実を図っていくことにもつながる。子供たちが、自分たちの思いを大切に表現や鑑賞の活動を実現することで、さらに周りの「ひと」「もの」「こと」へのつながりを深めていく。

このように、学びの喜びを実感させ、つながりを深めていくことが、主体的に表現や鑑賞の活動へ取り組む意欲を生み、次の活動へと結び付くことになる。

(3) 「自らつくりだす造形活動」とは

図画工作科では、深い学びにつながる「見方・考え方」を「造形的な見方・考え方」と捉えている。「造形的な見方・考え方」とは、自分の感性や想像力を働かせて、形や色、質感などにかかわり、つくりたいものや表したいもののイメージを明確にして表現したり、鑑賞を通して自分なりの意味を見いだしたりすることである。つまり、図画工作科では、完成された作品だけでなく、その活動の過程において新しい価値をつくりだすことに教科の本質がある。

「自らつくりだす造形活動」とは、表現と鑑賞の活動において、子供たちが形や色などから感じたことを基に自ら働きかけ、自分で新たな意味や価値をつくりだす創造的な活動である。作品は、自分にとっての大切なものとなったり、見る人に感動を与える存在になったりもする。また、その製作過程において、自分の表現へのこだわりや作品への思い入れが強まることなども、新たな意味や価値をつくり出したといえる。3つの要素と豊かにかかわり、「ひと」「もの」「こと」とつながりながら、自らが思考・判断し、自己決定をすることで新しい価値が生まれるのである。

(4)「であい つたえあい つくりだす喜びを味わう授業づくり」とは

子供たちは様々な「であい」の中で、自分の思いをどのように表すか考えていく。材料にふれた時は、色や形や感触などを十分確かめる。また、強く感動したことや想像したことからイメージをふくらませる。そして、自分のつくりたいものを決め、表現していく。今までその材料にかかわった出来事や、周りや地域の人とかかわった経験など、それまでの「であい」も加味されながら、豊かな発想をしていく。また、友達や教師との対話も「であい」である。教師は、最後まで目的意識をもって主体的に取り組むことができるように、様々な要素を考えながら「であい」の準備をする。

子供たちは材料と向き合い、形や色をどうつくりだすか、他のものとどう組み合わせでつくるか自己内対話をしている。また、自分や友達の作品のよさを見付け共感することにより、自己肯定感が生まれ、それぞれの作品を通してお互いの存在を認め合う場となる。それらの活動により、さらに次の造形への意欲が高まると考えられる。常に、子供たちは「つたえあう」活動を繰り返している。教師は、授業の中で子供に付けさせたい力は何かを考え、場の設定をしたり、共感したり、適切な声かけをしたりしなければならない。また、子供が意欲をもって活動したり、製作途中の作品を把握したりする上で、ICTの活用なども有効である。

この「であい」、「つたえあう」授業の中で、材料にかかわり、「つくり、つくりかえ、つくる」活動が実践され、「つくりだす喜び」を味わうことができると考える。これらの活動を基盤として、自分の思いを表現するために、生き生きと活動し、つくりだす喜びを味わう授業を実践していきたい。

4 研究内容

図画工作科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のためには、子供一人一人が「造形的な見方・考え方」を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ることが大切である。育成を目指す「三つの資質・能力」は、相互に関連し合い一体となって働くものであり、必ずしも、別々に分けて育成したり、順序性をもって育成したりするべきではない。教師が、系統性を考慮に入れながら、その題材で育む資質・能力を見極め、本時のねらいを設定し、授業展開を工夫するために、次のことを研究していく。

(1)「何を学ぶか」を明確にした指導計画の作成

子供に育成する資質・能力を明確にした上で、これまでの経験を生かしながら資質・能力を向上させ、「造形的な見方・考え方」を働かせることができるような題材を選択・配列し、適正な評価を考慮し指導計画を作成する。その際、子供の学習意欲を高めるために発達段階に応じて、系統性を踏まえた学びが展開できるように工夫する。また、地域の実情や各教科等との関連を意識した題材の設定を行うことも大切である。

指導計画の作成の際には、「A表現（1）ア、イ」と「A表現（2）ア、イ」、また「B鑑賞（1）ア」のバランスや〔共通事項〕（1）ア、イの視点から指導計画や内容、方法を検討し、目標の設定や具体的な指導と評価を考えることにも留意していきたい。

これまでの研究において、子供の発達段階に応じて、幼稚園、小学校、中学校の内容の連続性に配慮することも「つながり」と捉え、育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にし、年間指導計画や題材設定、指導方法等を工夫してきた。

今後も、学びの連続性を踏まえた系統的な指導計画の作成を重視する。

(2)「どのように学ぶか」主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点

「主体的・対話的で深い学び」を、不断に授業を改善する「視点」として捉え、常に「子供主体の授業だったか」「指示や説明に終始せず、子供の考えや意見を取り上げる場を設定できたか」などを、子供の学びの質を向上させる視点としたい。

子供が「主体的」に学習に取り組めるよう、子供の表現欲求に合わせたり、必要性のある題材を選択したりすることや、学習の見通しを立てるなど、子供自らが主体的に表現に取り組もうとするような場面設定を行うことなどが大切である。

一人一人が資質・能力を十分に働かせることができる学習活動にするために、例えば、材料について、子供に探し集めさせることも資質・能力を高めさせることになるだろう。また、教師が近隣にある自然材や人工材などの子供がふれる材料や場所を幅広く用意する。そのようなことから、主体的に取り組もうとする意欲の高まりとともに、造形活動の充実が期待できる。

子供の中で、「自分の見方・考え方」が鍛えられていくように、図画工作科においても対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するかという点に留意する。その際、「この形や色でよいか」「自分の表したいことは表せているか」など、子供が自分の行為や活動を振り返り、感じたり、考えたりできるようにすることで、自分の成長やよさ、可能性などに気づき、次の学習への意欲へとつなげられるようにする。また、友達に紹介したくなる、話し合いたくなる場面を授業展開の中で適切に設定し、互いの活動や作品を見合いながら考えたことを伝え合ったり、思ったことを話し合ったりするなどの言語活動を充実することが大切である。そして、教師との対話、子供同士の対話だけでなく、保護者や地域、社会の人と交流する機会を設定することも考えられる。

さらに、「つくり、つくりかえ、つくる」という学習過程を通して、子供は自ら発想・構想・表現をし、その表現からまた新たな発想をして表現し続ける。この道程こそが「深い学び」につながっていく。そのため、発想や構想の段階での指導のあり方をより一層重視したい。また、一連の過程を通して、子供自らが自分の学びを振り返る場面も必要となる。

(3) 「何ができるようになるか」資質・能力の育成と、指導に生きる評価の工夫

新しい「三つの資質・能力」の観点から、指導と評価の一体化を一層進めていく。子供一人一人が表現活動の中で、どのような力を発揮しているのかを目の前の子供の姿から見取り、一人一人のよさを認め、子供たちに表現への自信と喜びを味わわせ、更なる表現への意欲をもたせたい。そのため、完成された作品だけでなく、その過程に目を向け、育てたい資質や能力の発揮状況を適切に評価し、共感と支援を通して、子供一人一人の造形活動への意欲、資質や能力を高める指導につなげていくことが重要となる。活動中の姿を評価することは、指導（支援）する時の手がかりとなり、「指導と評価」は常に一体となっていることを認識しておく。

その際、子供自身が自らの学びを振り返って次の学びへ向かうことができるように、自他の作品や取組・行為のよさについて記述したり、話し合ったりする自己評価や相互評価等を用いた場を設定する。また、子供自身が自らの学びを実感できるように、子供の表現や思考を具体的に見取る評価や、学習の過程における一人一人の学びの評価の仕方を工夫したり、ポートフォリオ、デジタル記録やワークシートなど多様な評価方法を活用したりすることなど、指導に生きる評価へと取り組んでいく。

5 研究方法

(1) 本年度は研究大会の会場校である美馬郡半田小学校を中心とする研究組織をつくり研究計画を立てる。また、発表担当の各郡市の研究組織と協働しながら事前研究や授業実践を行い研究内容の解明を図る。

半田小学校では、低・中・高学年の3公開授業と1～6学年の分科会を実施する。

低学年部会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して気付くとともに、手や体全体の感覚などを働かせ材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○ 造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方などについて考え、楽しく発想や構想をしたり、身の回りの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○ 楽しく表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養うにはどうすればよいか。
-------	---

<p>中学年部会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して分かるとともに、手や体全体を十分に働かせ材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○ 造形的なよさや面白さ、表したいこと、表し方などについて考え、豊かに発想や構想をしたり、身近にある作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○ 進んで表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うにはどうすればよいか。
<p>高学年部会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を活用し、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○ 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、親しみのある作品などから自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにするにはどうすればよいか。 ○ 主体的に表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養うにはどうすればよいか。

※各部会テーマは、育てるべき「三つの資質・能力」に対応するものを示しており、郡市や学校、児童の実態によって3つの事項の中から、重点化して実践してもよい。

(2) 各郡市研究会は、研究主題の解明に向けて共通理解を図り、研究や授業実践を行う。

(3) 研究成果をまとめ、研究集録（第56集）を発刊する。

参考文献：「小学校学習指導要領図画工作編（平成29年6月）」文部科学省

「なるほど！そうか！学習指導要領 新・図工のABC」 阿部宏行 日本文教出版 2017

「よくわかる図画工作科 なっとく新学習指導要領 授業への生かし方」

小林貴史／北澤俊之／小林恭代／大櫃重剛 開隆堂 2017

「平成29年度版 小学校新学習指導要領 ポイント総整理 図画工作」

阿部宏行 東洋館出版社 2017

「初等教育資料 2017年6月号・12月号」 東洋館出版社